

図 99 要介護度別自分の名前をいう「できない」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

表 103 要介護度別自分の名前をいう「できない」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0	0.3	1.1	3.3	5.8	14.0	1.5
2回目	4.3	0.2	0.5	1.6	3.4	5.0	7.8	1.5
3回目	0	0.3	0.8	2.5	4.7	5.6	9.0	2.1
4回目	0	0.9	2.0	4.2	7.8	8.1	10.1	3.6

(40) 今の季節を理解

全体的に今の季節の理解については、「できる」が 13,397 名 (82.9%)、「できない」が 2,759 名 (17.1%) であった。2 回目は、「できる」が 13,106 名 (81.1%)、「できない」が 3,050 名 (18.9%) であった。3 回目は、「できる」が 12,501 名 (77.4%)、「できない」が 3,655 名 (22.6%) であった。4 回目は、「できる」が 11,749 名 (72.7%)、「できない」が 4,407 名 (17.7%) であった。

このように今の季節を理解できない要介護高齢者の割合は、全体としては、初回 17.1%、2 回目 18.9%、3 回目 22.6%、4 回目 27.3%と、初回から 4 回目まで、漸次、増加していた。

要介護度別には、非該当から要介護 3 までは、初回から 4 回目まで、漸次、今の季節を理解できる人は、減少していた。要介護 4 と 5 は、それぞれ、62.9%が 66.6%へ、53.7%が 65.1%へと初回から 2 回目に増加していたが、2 回目から 3 回目、3 回目から 4 回目は、他の要介護度と同様に、今の季節を理解できる人は減少していた。

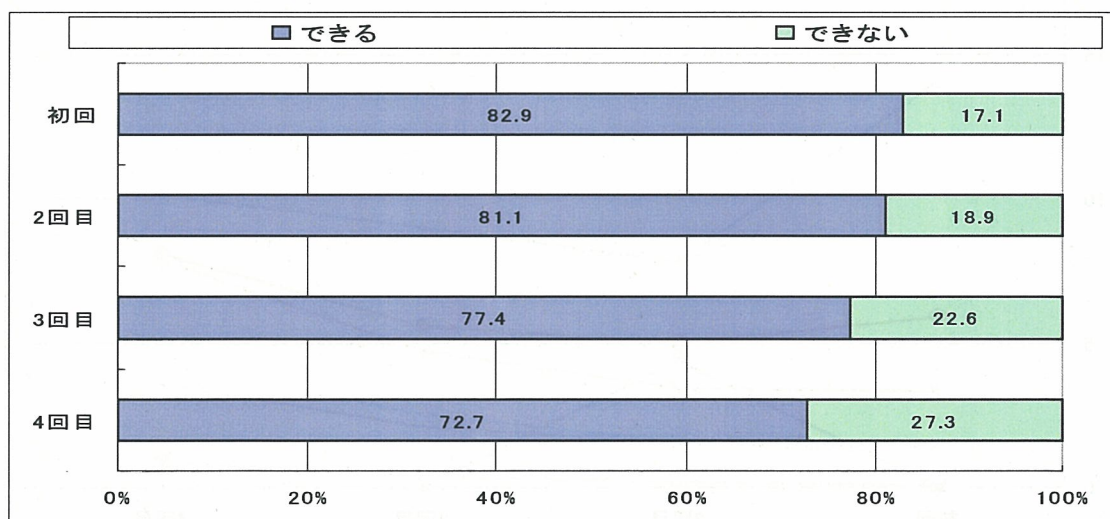


図 100 今の季節を理解 (N=16,156)

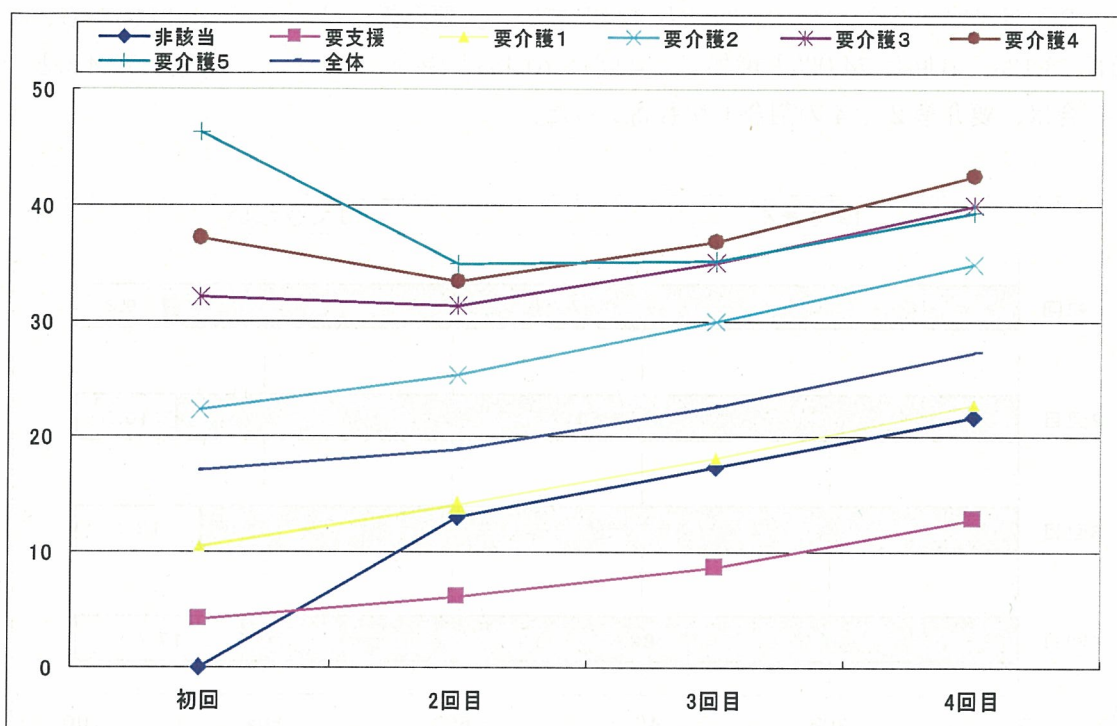


図 101 要介護度別今の季節を理解「できない」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

表 104 要介護度別今の季節を理解「できない」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	4.2	10.5	22.3	32.1	37.1	46.3	17.1
2回目	13.0	6.1	14.1	25.3	31.3	33.4	34.9	18.9
3回目	17.4	8.7	18.1	30.0	35.1	36.8	35.2	22.6
4回目	21.7	12.8	22.7	34.8	40.0	42.5	39.4	27.3

(41) 場所の理解

全体として、場所を理解することについては、初回は、「できる」が14,656名(90.7%)、「できない」が1,500名(9.3%)であった。2回目は、「できる」が14,433名(89.3%)、「できない」が1,723名(10.7%)であった。3回目は、「できる」が14,007名(86.7%)、「できない」が2,149名(13.3%)であった。4回目は、「できる」が13,303名(86.7%)、「できない」が2,853名(13.3%)であった。

このように場所を理解することができない要介護高齢者の割合は、初回9.3%、2回目10.7%、3回目13.3%、4回目17.7%と増加していた。

要介護別には、非該当は、初回は場所の理解ができるが100%であったが、2回目は91.3%と減少し、3回目は95.7%と増加したが、4回目については91.3%と減少していた。要支援から要介護3までは、場所の理解ができる割合は、回数が増加するにしたがって減少していた。要介護4は、初回が70.7%で2回目が74.5%と場所を理解できる割合は増加する

が、3回目 71.3%と減少し、4回目も減少していた。要介護5は、初回の64.5%から、2回目 73.1%、3回目 74.0%と増加し、4回目 70.4%と減少していた。しかし、70.4%という割合は、要介護2や4の割合よりも高かった。

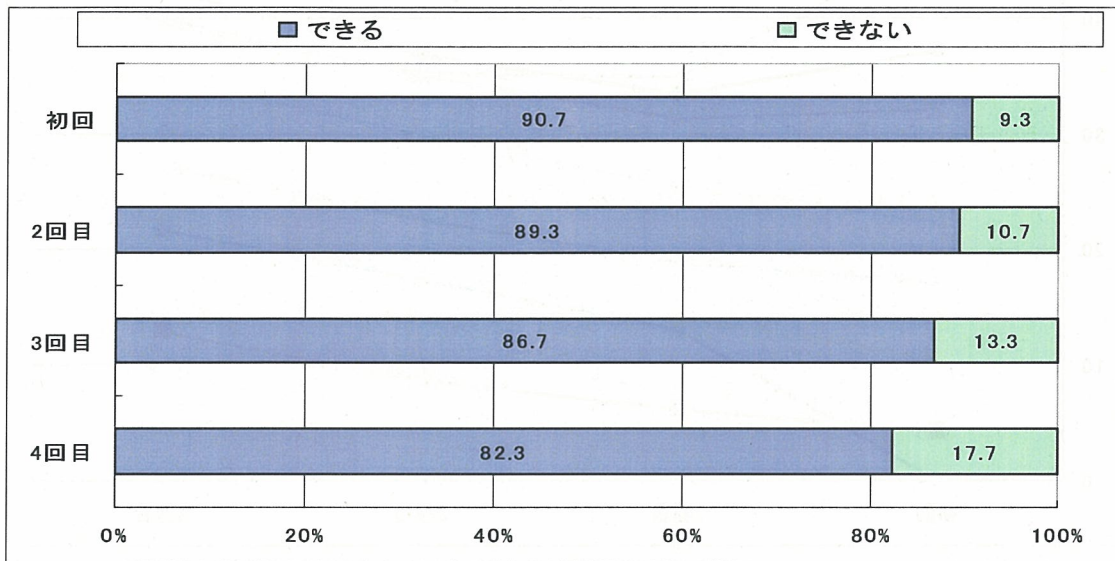


図 102 場所の理解 (N=16,156)

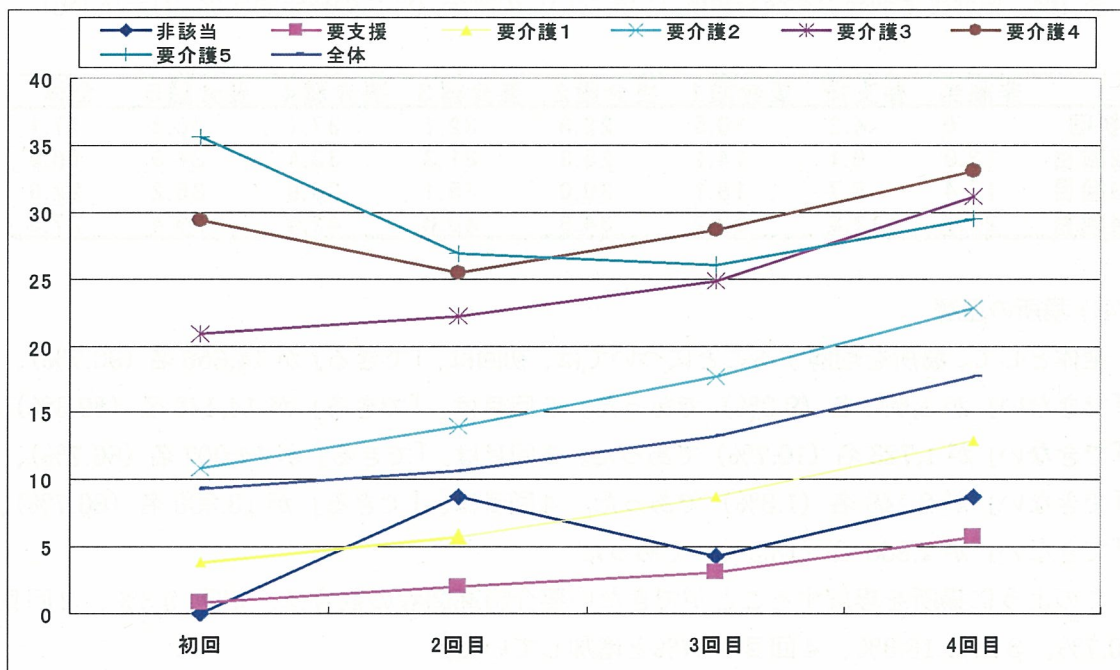


図 103 要介護度別場所の理解「できない」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

表 105 要介護度別場所の理解「できない」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0.8	3.8	10.9	20.9	29.3	35.5	9.3
2回目	8.7	2.0	5.8	13.9	22.2	25.5	26.9	10.7
3回目	4.3	3.1	8.7	17.6	24.9	28.7	26.0	13.3
4回目	8.7	5.8	12.9	22.8	31.2	33.0	29.6	17.7

(42) 物を盗られたなどと被害的になることがあるか

全体としては、物を盗られたなどと被害的になることが、初回は「ない」が 14,149 名 (87.6%)、「ときどきある」が 796 名 (4.9%)、「ある」が 1,211 名 (7.5%) であった。2 回目は、「ない」が 14,319 名 (88.6%)、「ときどきある」が 758 名 (4.7%)、「ある」が 1,079 名 (6.7%) であった。3 回目は、「ない」が 14,331 名 (88.7%)、「ときどきある」が 731 名 (4.5%)、「ある」が 1,094 名 (6.8%) であった。4 回目は、「ない」が 14,343 名 (88.8%)、「ときどきある」が 742 名 (4.6%)、「ある」が 1071 名 (6.6%) であった。

これらの結果から、物を盗られたなどと被害的になることが、「ときどきある」「ある」という問題行動がある要介護高齢者の割合は、初回は 12.4%、2 回目は 11.4%、3 回目は 11.3%、4 回目は、11.2%と回数が増加するにしたがって、減少する傾向が見られた。

要介護度別には、物を盗られたなどと被害的になることがある人の割合は、非該当では 3 回目に 4.3%発生するだけで、初回、2 回、4 回とも 0 であった。要支援では、こうした問題行動がある人は、初回から 4 回にかけて増加していた。要介護 1 では、初回、2 回目が 88.4%、3 回目、4 回目が 88.3%とほとんど変化がなかった。要介護 2 と 3 においては、回数が増えるにしたがって、こうした問題行動がある人の割合は減少していた。要介護 4 と 5 は、初回から 2 回目においては、問題行動のある人の割合は減少していたが、一方で 3 回目、4 回目では増加していた。

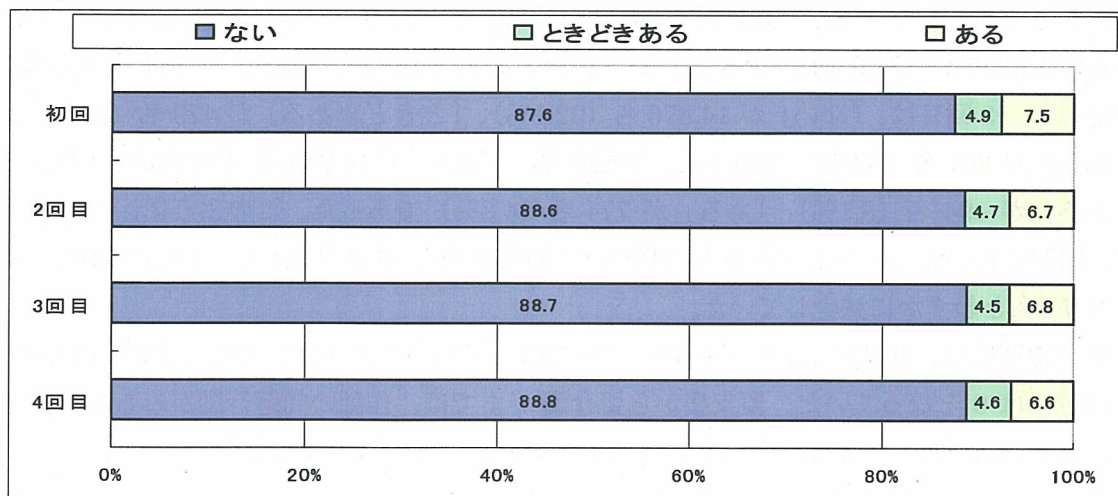


図 104 被害的 (N=16,156)

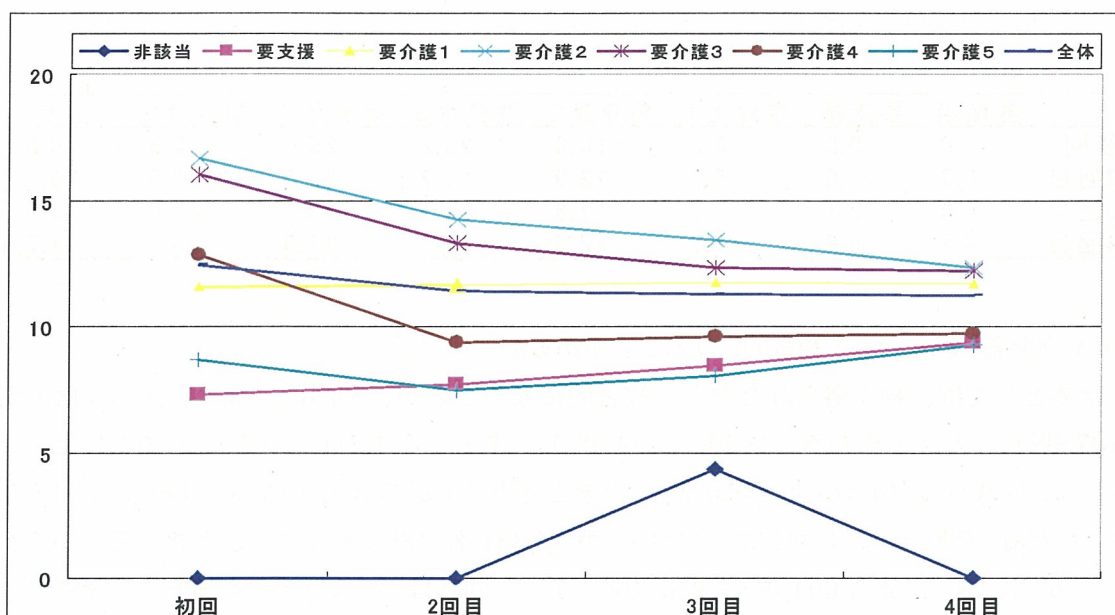


図 105 要介護度別被害的「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

表 106 要介護度別被害的「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	7.3	11.6	16.7	16.0	12.8	8.7	12.4
2回目	0	7.7	11.6	14.2	13.3	9.3	7.5	11.4
3回目	4.3	8.4	11.7	13.4	12.3	9.6	8.1	11.3
4回目	0	9.3	11.7	12.3	12.2	9.7	9.3	11.2

(43) 作話し、周囲に言いふらすことが (作話)

全体として、作話し、周囲に言いふらすことが、初回は、「ない」が 14,801 名 (91.6%)、「ときどきある」が 558 名 (3.5%)、「ある」が 797 名 (4.9%) であった。2 回目は、「ない」が 14,847 名 (91.9%)、「ときどきある」が 555 名 (3.4%)、「ある」が 754 名 (4.7%) であった。3 回目は、「ない」が 14,876 名 (92.1%)、「ときどきある」が 479 名 (3.0%)、「ある」が 801 名 (5.0%) であった。4 回目は、「ない」が 14,888 名 (92.2%)、「ときどきある」が 494 名 (3.1%)、「ある」が 774 名 (4.8%) であった。このように、作話をし、周囲に言いふらすことがある人の割合は、初回 8.4%、2 回目 8.1%、3 回目 7.9%、4 回目 7.8%とわずかに減少していた。

要介護別には、非該当において作話をする人は、初回から 3 回目までは 4.3%と同じで、4 回目には 0 となっていた。要支援から要介護 1 までは、作話の問題行動がみられる割合は、認定回数が増えるにしたがって、増加していた。一方、要介護 2 から 4 までは、この問題行動が発現した割合は、初回が最も高く、4 回目まで減少していた。要介護 5 は、初回 93.4%で、2 回目 90.1%と作話をする割合が増加していたが、2 回目、3 回目は減少し

ていた。

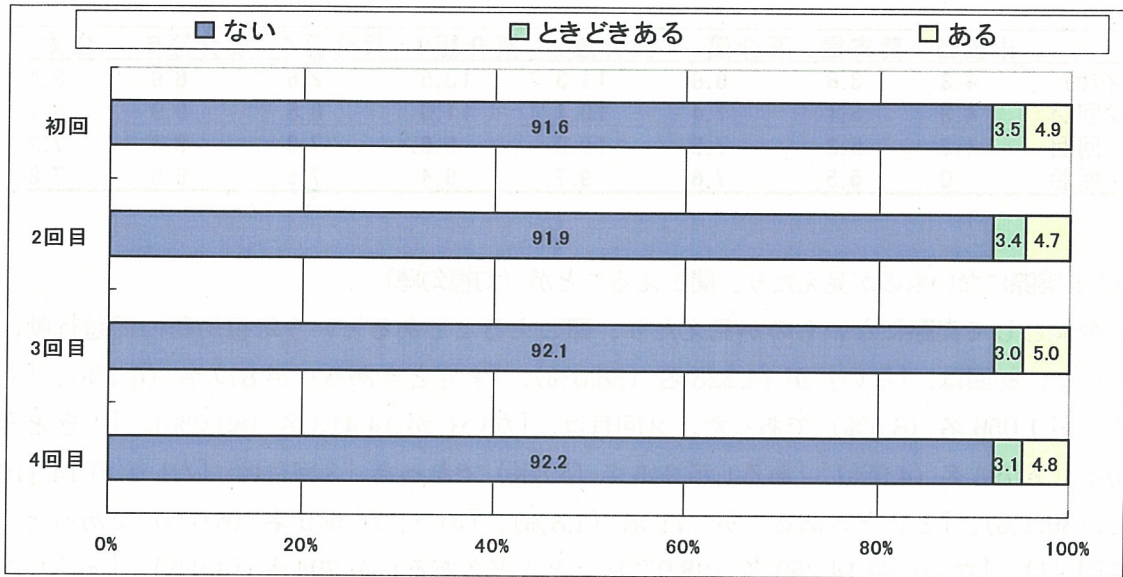


図 106 作話 (N=16,156)

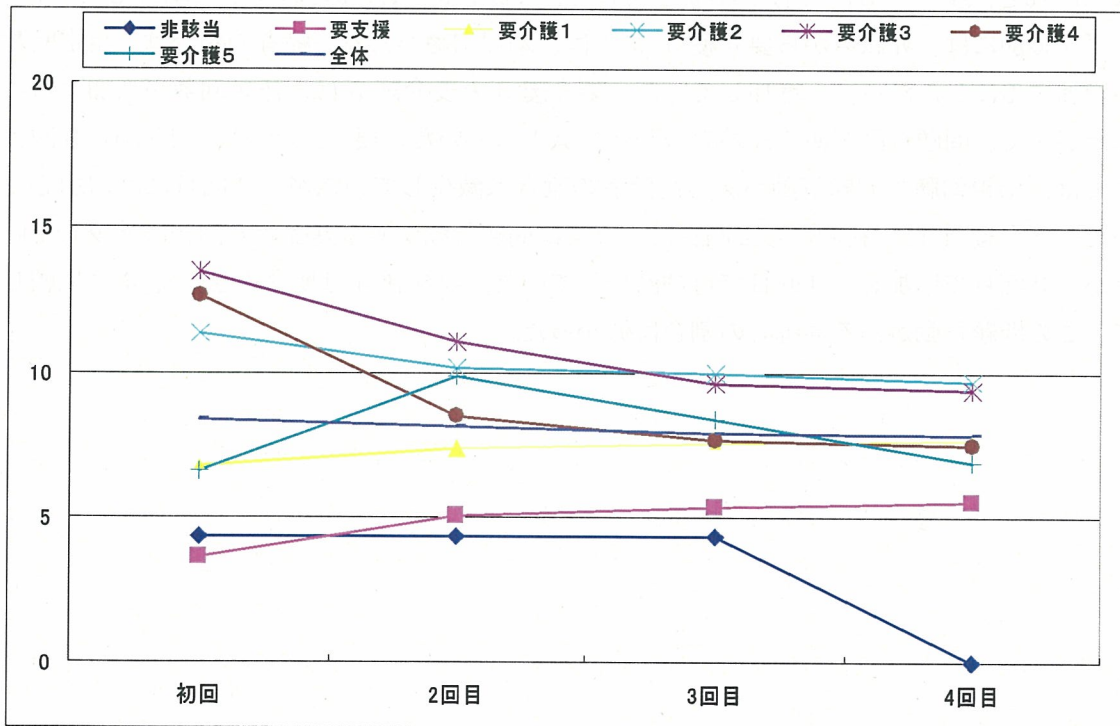


図 107 要介護度別作話「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

表 107 要介護度別作話「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	4.3	3.6	6.8	11.3	13.5	12.6	6.6	8.4
2回目	4.3	5.1	7.4	10.1	11.0	8.5	9.9	8.1
3回目	4.3	5.3	7.5	10.0	9.6	7.6	8.4	7.9
4回目	0	5.5	7.6	9.7	9.4	7.5	6.9	7.8

(44) 実際にはないものが見えたり、聞こえることが (幻視幻聴)

全体として実際にはないものが見えたり、聞こえることあるという幻視幻聴の問題行動について、初回は、「ない」が 14,223 名 (88.0%)、「ときどきある」が 877 名 (5.4%)、「ある」が 1,056 名 (6.5%) であった。2 回目は、「ない」が 14,416 名 (89.2%)、「ときどきある」が 795 名 (4.9%)、「ある」が 945 名 (5.8%) であった。3 回目は、「ない」が 14,416 名 (89.2%)、「ときどきある」が 771 名 (4.8%)、「ある」が 969 名 (6.0%) であった。4 回目は、「ない」が 14,358 名 (88.9%)、「ときどきある」が 794 名 (4.9%)、「ある」が 1,004 名 (6.2%) であった。

このような幻視幻聴の問題行動がある要介護高齢者の割合は、初回は 12.0% で、2 回目は 10.8% と減少し、3 回目も 10.8% と同じで、4 回目に 11.1% とわずかに増加していた。

要介護別には、非該当から要介護 1 までは、幻視幻聴がある高齢者の割合は、認定回数が増加するにしたがって、増加していた。要介護 3 と要介護 5 は、認定回数が増加するにしたがって、問題行動がある高齢者の割合は低下していた。要介護 2 は、初回から 3 回目までは、幻視幻聴の問題行動がある高齢者の割合は減少していたが、4 回目には増加していた。要介護 4 は、初回から 2 回目にかけては問題行動がある高齢者の割合は減少していたが、3 回目で増加し、4 回目で再び減少していた。要介護 5 は要介護 2、3、4 に比較して、この問題行動がある高齢者の割合は低かった。

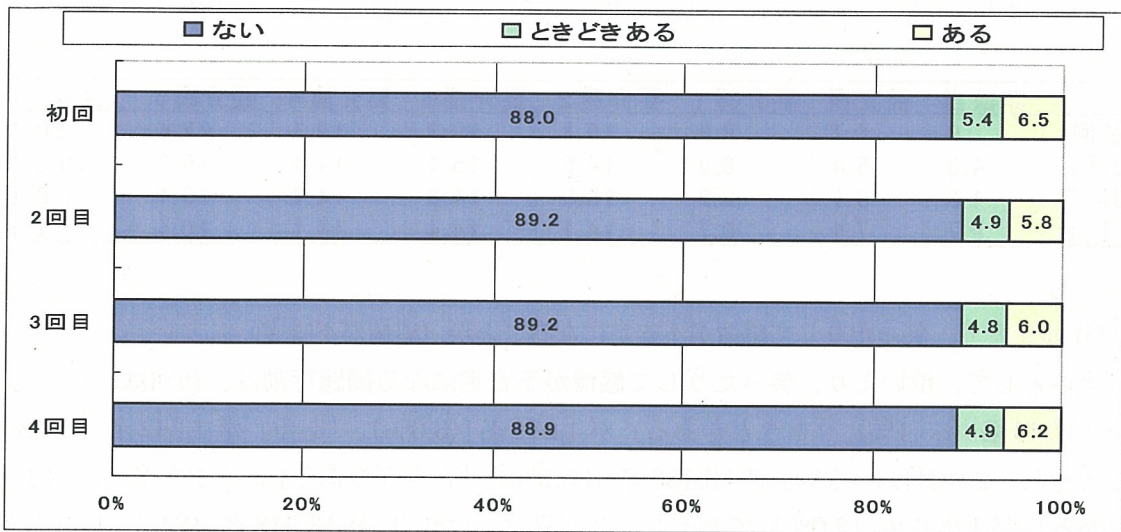


図 108 幻視幻聴 (N=16,156)

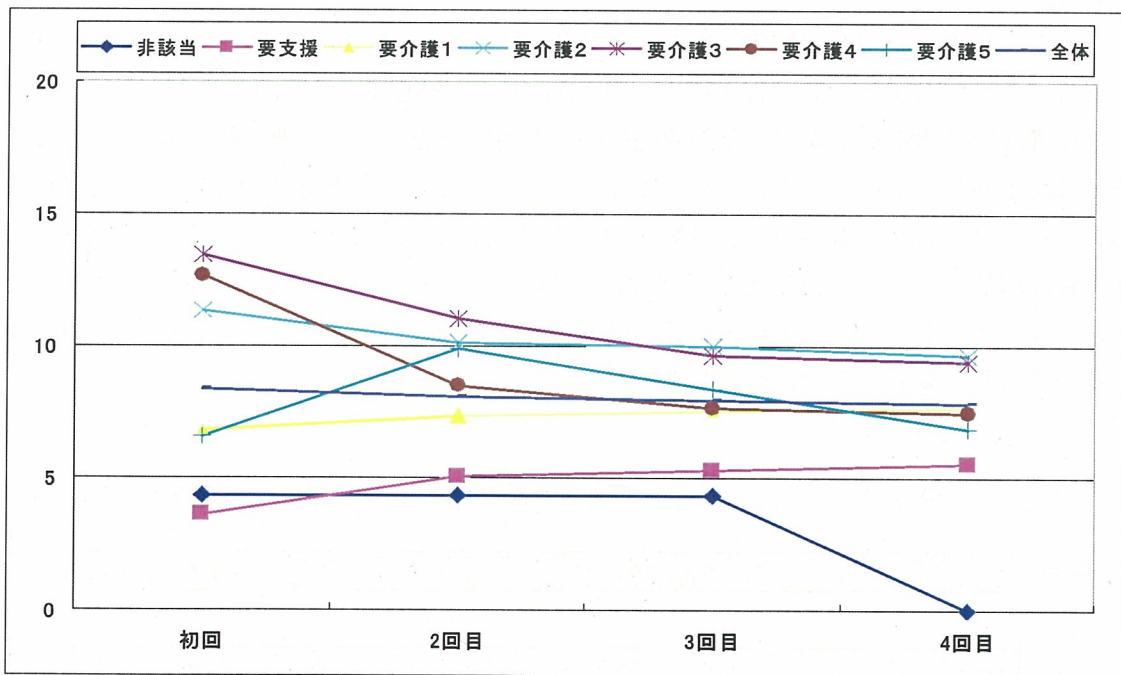


図 109 要介護度別の幻視幻聴「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

表 108 要介護度別の幻視幻聴「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	4.7	8.8	16.3	19.3	19.3	22.4	12.0
2回目	4.3	5.4	8.9	14.5	15.4	14.4	15.2	10.8
3回目	4.3	6.1	9.2	13.9	14.8	14.7	13.1	10.8
4回目	8.7	7.4	9.7	14.1	14.4	14.1	10.4	11.1

(45) 泣いたり、笑ったりして感情が不安定になることが (感情が不安定)

全体として、泣いたり、笑ったりして感情が不安定になる問題行動は、初回は、「ない」が13,743名(85.1%)、「ときどきある」が1,071名(6.6%)、「ある」が1,342名(8.3%)であった。2回目は、「ない」が13,733名(85.0%)、「ときどきある」が1,127名(7.0%)、「ある」が1,296名(8.0%)であった。3回目は、「ない」が13,618名(84.3%)、「ときどきある」が1,047名(6.5%)、「ある」が1,491名(9.2%)であった。4回目は、「ない」が13,500名(83.6%)、「ときどきある」が1,089名(6.7%)、「ある」が1,567名(9.7%)であった。

これらの結果、感情が不安定になるという問題行動がある要介護高齢者の割合は、初回14.9%、2回目15.0%、3回目15.7%、4回目16.4%と増加する傾向が見られた。

要介護度別に感情が不安定となる問題行動がある割合をみると、要支援や要介護1においては認定回数が増加するにしたがって高くなっていった。要介護3と4において、初回から2回目、2回目から3回目は、問題行動がある割合が減少するが、一方で、3回目から4回目に増加していた。要介護2と要介護5は、初回から2回目に、この問題行動がある割合は減少するが、2回目から3回目には増加し、3回目から4回目では要介護2は減少するのに対し、要介護5では増加していた。

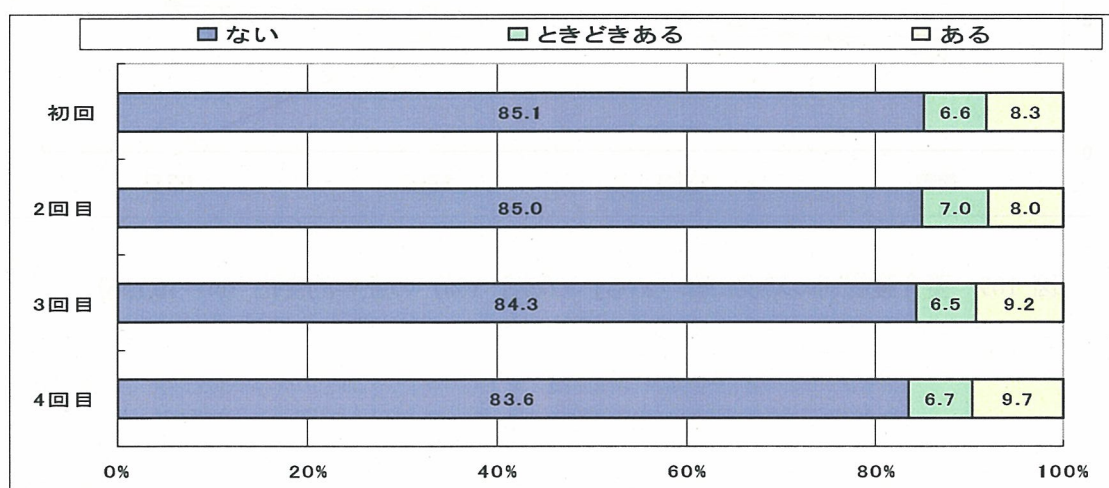


図 110 感情が不安定 (N=16,156)

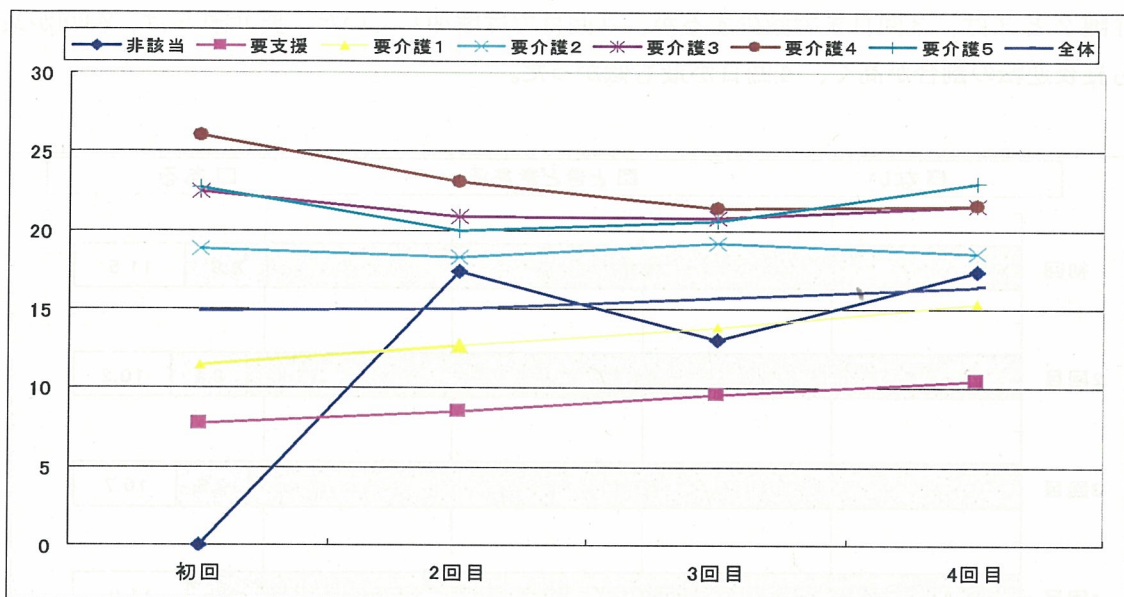


図 111 要介護度別感情が不安定「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

表 109 要介護度別感情が不安定「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	7.7	11.5	18.8	22.4	26.0	22.7	14.9
2回目	17.4	8.5	12.7	18.3	20.9	23.1	20.0	15.0
3回目	13.0	9.6	13.9	19.2	20.8	21.4	20.6	15.7
4回目	17.4	10.4	15.4	18.5	21.5	21.6	23.0	16.4

(46) 夜間不眠あるいは昼夜の逆転が (昼夜逆転)

全体としては、夜間不眠あるいは昼夜の逆転は、初回において、「ない」が 12,868 名 (79.6%)、「ときどきある」が 1,431 名 (8.9%)、「ある」が 1,857 名 (11.5%) であった。2 回目は、「ない」が 13,195 名 (81.7%)、「ときどきある」が 1,308 名 (8.1%)、「ある」が 1,653 名 (10.2%) であった。3 回目は、「ない」が 13,158 名 (81.4%)、「ときどきある」が 1,270 名 (7.9%)、「ある」が 1,728 名 (10.7%) であった。4 回目は、「ない」が 12,944 名 (80.1%)、「ときどきある」が 1,287 名 (8.0%)、「ある」が 1,925 名 (11.9%) であった。

これらの結果から、夜間不眠あるいは昼夜の逆転が「ときどきある」「ある」という要介護高齢者は、初回 20.4%、2 回目 18.3%と減少するが、3 回目は 18.6%と増加し、4 回目も 19.9%と増加していた。

要介護度別には、要支援において、昼夜逆転は認定回数が増加するにしたがって増えていたが、逆に要介護 4 においては、認定回数が増加するにしたがって減少していた。要介護 1 では、初回から 2 回目に昼夜逆転は減少するが、3 回目、4 回目と増加していた。要

介護2と3は、3回目まで減少するが、4回目では増加していた。要介護5は、初回が最も昼夜逆転の割合が高く、4回目では最も低かった。

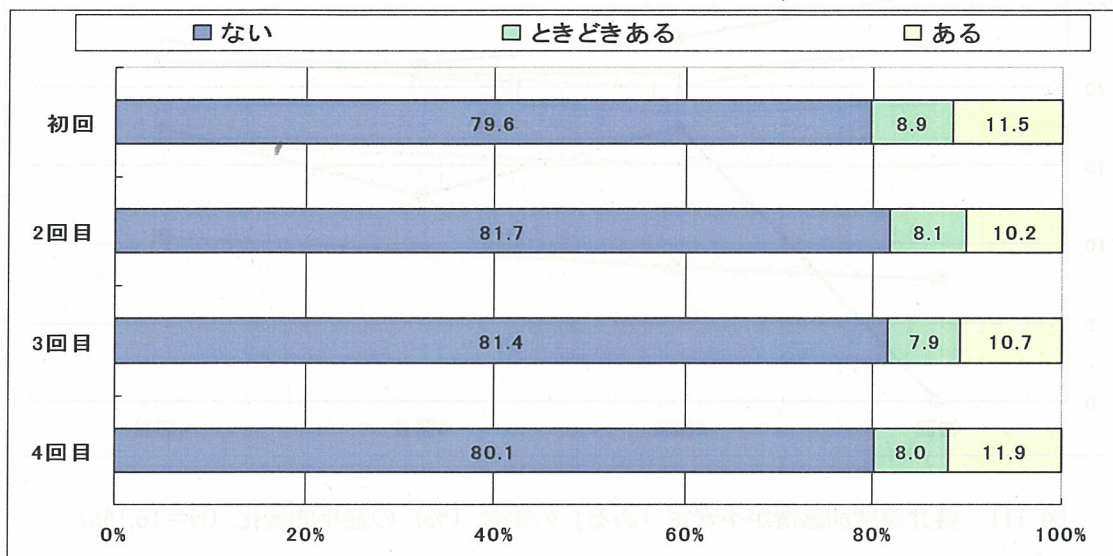


図 112 昼夜逆転 (N=16,156)

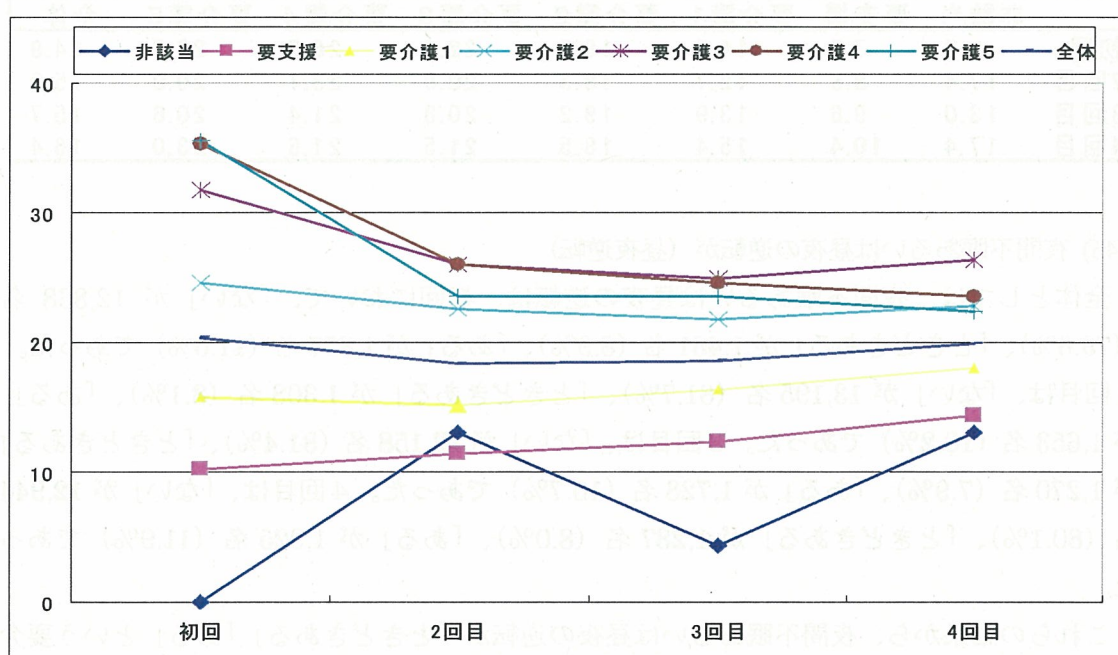


図 113 要介護度別昼夜逆転「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

表 110 要介護度別昼夜逆転「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	10.2	15.8	24.6	31.8	35.3	35.5	20.4
2回目	13.0	11.4	15.1	22.6	26.0	26.0	23.6	18.3
3回目	4.3	12.4	16.4	21.8	24.9	24.6	23.6	18.6
4回目	13.0	14.4	18.0	22.9	26.3	23.6	22.4	19.9

(47) 暴言や暴行が (暴言暴行)

全体として暴言や暴行が、初回は「ない」が 14,537 名 (90.0%)、「ときどきある」が 713 名 (4.4%)、「ある」が 906 名 (5.6%) であった。2 回目は、「ない」が 14,554 名 (90.1%)、「ときどきある」が 712 名 (4.4%)、「ある」が 890 名 (5.5%) であった。3 回目は、「ない」が 14,334 名 (88.7%)、「ときどきある」が 776 名 (4.8%)、「ある」が 1,046 名 (6.5%) であった。4 回目は、「ない」が 14,246 名 (88.2%)、「ときどきある」が 789 名 (4.9%)、「ある」が 1,121 名 (6.9%) であった。

これらの結果、暴言や暴行がある要介護高齢者の割合は、初回は 10.0%、2 回目 9.9%、3 回目 11.3%、4 回目 11.8%と、初回から 2 回目にわずかに減少するが、3 回目、4 回目と漸次、増加していた。

要介護度別には、非該当、要支援、要介護 1 と 5 は、すべて暴言暴行ありの割合は、認定回数が増加するにしたがって増加していた。要介護 2 から 4 までは、初回から 2 回目までに減少していた。2 回目から 3 回目の変化において、要介護 2 と 3 は増加し、要介護 4 は減少していた。3 回目から 4 回目において、要介護 2 と 4 は増加するが要介護 3 は減少していた。

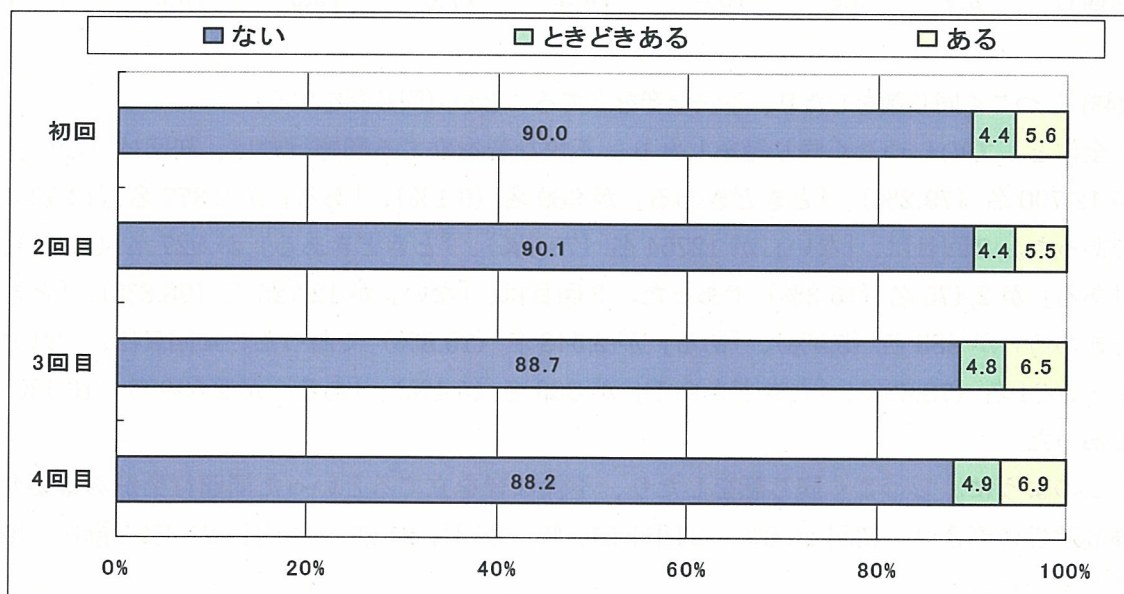


図 114 暴言暴行 (N=16,156)

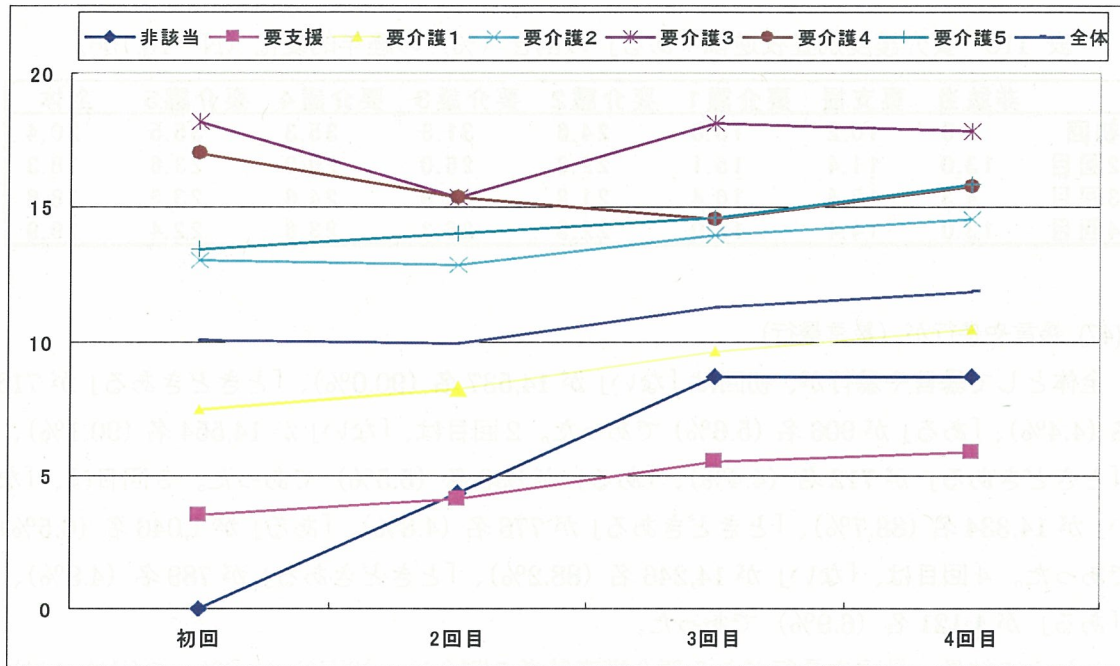


図 115 要介護度別暴言暴行「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

表 111 要介護度別暴言暴行「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	3.5	7.5	13.0	18.2	17.0	13.4	10.0
2回目	4.3	4.1	8.2	12.8	15.4	15.4	14.0	9.9
3回目	8.7	5.5	9.6	14.0	18.1	14.5	14.6	11.3
4回目	8.7	5.9	10.4	14.5	17.8	15.8	15.8	11.8

(48) しつこく同じ話をしたり、不快な音を立てることが (同じ話をする)

全体としてのしつこく同じ話をしたり、不快な音を立てる問題行動は、初回は「ない」が 12,790 名 (79.2%)、「ときどきある」が 989 名 (6.1%)、「ある」が 2,377 名 (14.7%) であった。2 回目は、「ない」が 12,754 名 (78.9%)、「ときどきある」が 927 名 (5.7%)、「ある」が 2,475 名 (15.3%) であった。3 回目は、「ない」が 12,725 名 (78.8%)、「ときどきある」が 883 名 (5.5%)、「ある」が 2,548 名 (15.8%) であった。4 回目は、「ない」が 12,694 名 (78.6%)、「ときどきある」が 866 名 (5.4%)、「ある」が 2,596 名 (16.1%) であった。

このように、しつこく同じ話をしたり、不快な音を立てるといった問題行動がある要介護高齢者の割合は、初回 20.8%、2 回目 21.1%、3 回目 21.2%、4 回目 21.4% と漸次、増加していた。

要介護度別には、この問題行動が多かったのは、要介護 2 であった。変化については、

非該当と要支援においては認定回数が増えるにしたがって、同じ話をするという問題行動がある割合は増加していたが、逆に要介護2と要介護4においては、認定回数が増えるにしたがって、問題行動がある割合が減少していた。要介護1と要介護5は初回から2回目に、この割合が増加していた。要介護3では、減少していた。2回目から3回目には、要介護1と3は減少するが要介護5は増加し、3回目から4回目においては、要介護1と3は増加するのに対し、要介護5は減少していた。

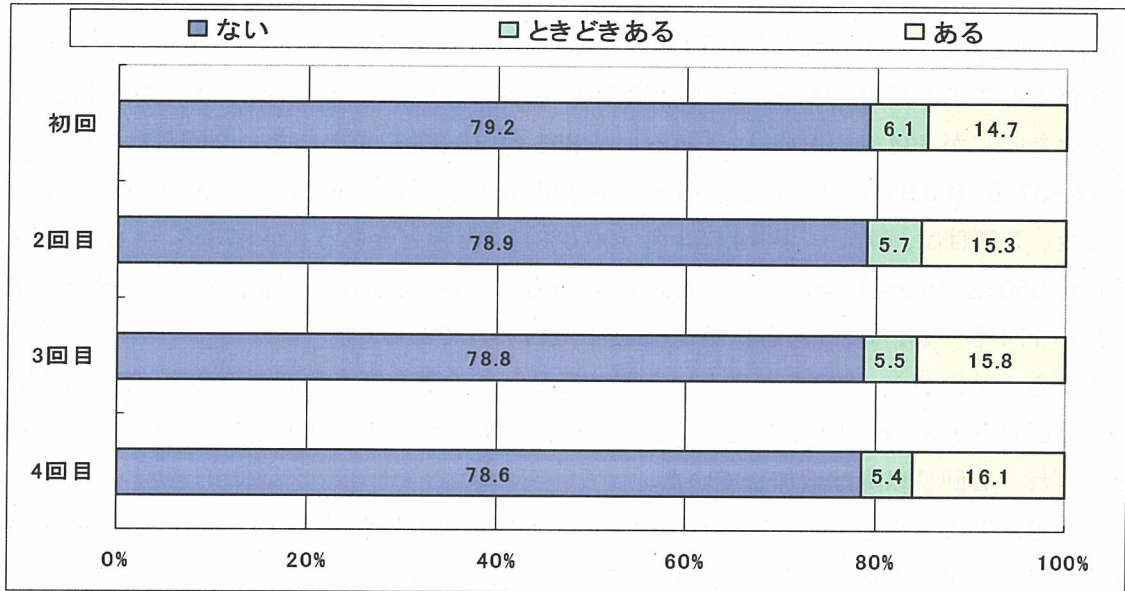


図 116 同じ話をする (N=16,156)

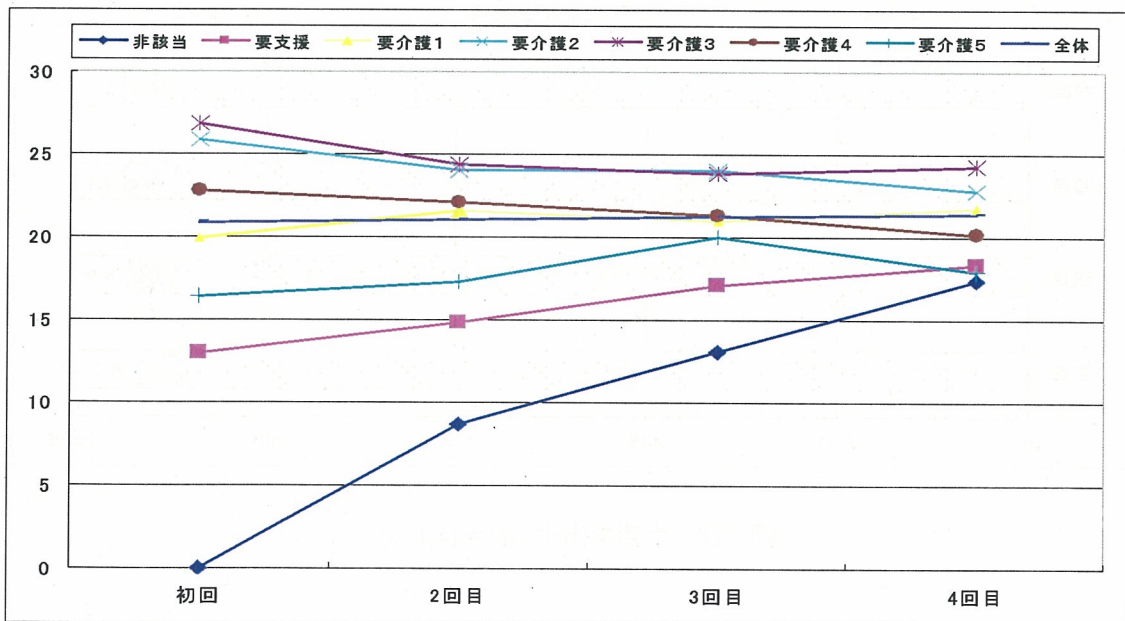


図 117 要介護度別 同じ話をする「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

表 112 要介護度別 同じ話をする「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	13.0	19.9	25.9	26.8	22.8	16.4	20.8
2回目	8.7	14.8	21.6	24.1	24.4	22.1	17.3	21.1
3回目	13.0	17.1	21.0	24.0	23.8	21.3	20.0	21.2
4回目	17.4	18.3	21.8	22.8	24.3	20.2	17.9	21.4

(49) 大声をだすことが (大声を出す)

全体としての大声をだすという問題行動は、初回は、「ない」が 14,641 名 (90.6%)、「ときどきある」が 664 名 (4.1%)、「ある」が 851 名 (5.3%) であった。2 回目は、「ない」が 14,687 名 (90.9%)、「ときどきある」が 639 名 (4.0%)、「ある」が 830 名 (5.1%) であった。3 回目は、「ない」が 14,533 名 (90.0%)、「ときどきある」が 673 名 (4.2%)、「ある」が 950 名 (5.9%) であった。4 回目は、「ない」が 14,358 名 (88.9%)、「ときどきある」が 714 名 (4.4%)、「ある」が 1,084 名 (6.7%) であった。

これらの結果から、大声をだすという問題行動がある要介護高齢者の割合は、初回 9.4%、から 2 回目 9.1% と初回から 2 回目にかけては減少するが、3 回目 10.0%、4 回目に 11.1% と示され、2 回目以降は増加していた。

要介護度別の大声を出す問題行動の割合は、非該当から要介護 1 までは、認定回数が増加するにしたがって増加していた。要介護 2 から 5 までは、初回から 2 回目に減少し、3 回目に増加し、4 回目にも増加というパターンが多かった。

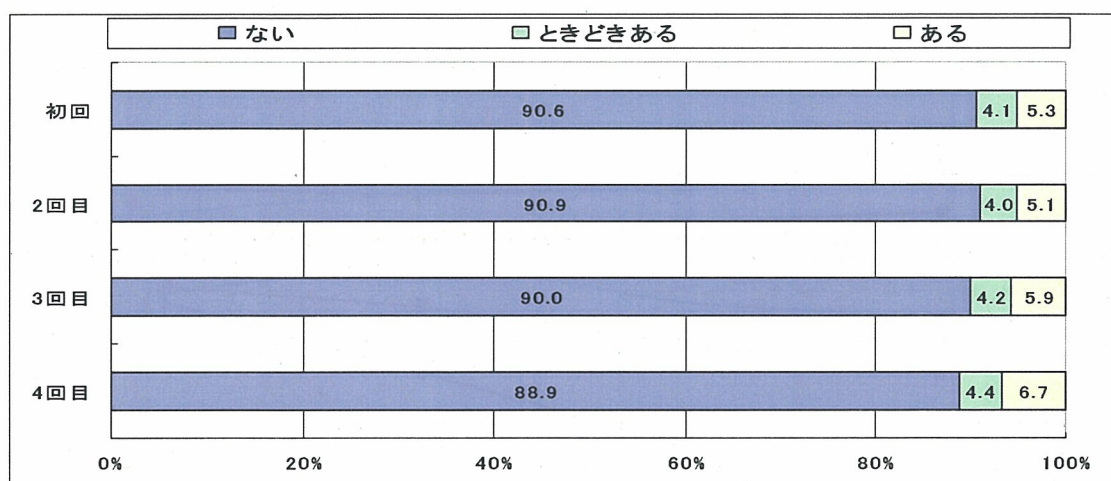


図 118 大声を出す (N=16,156)

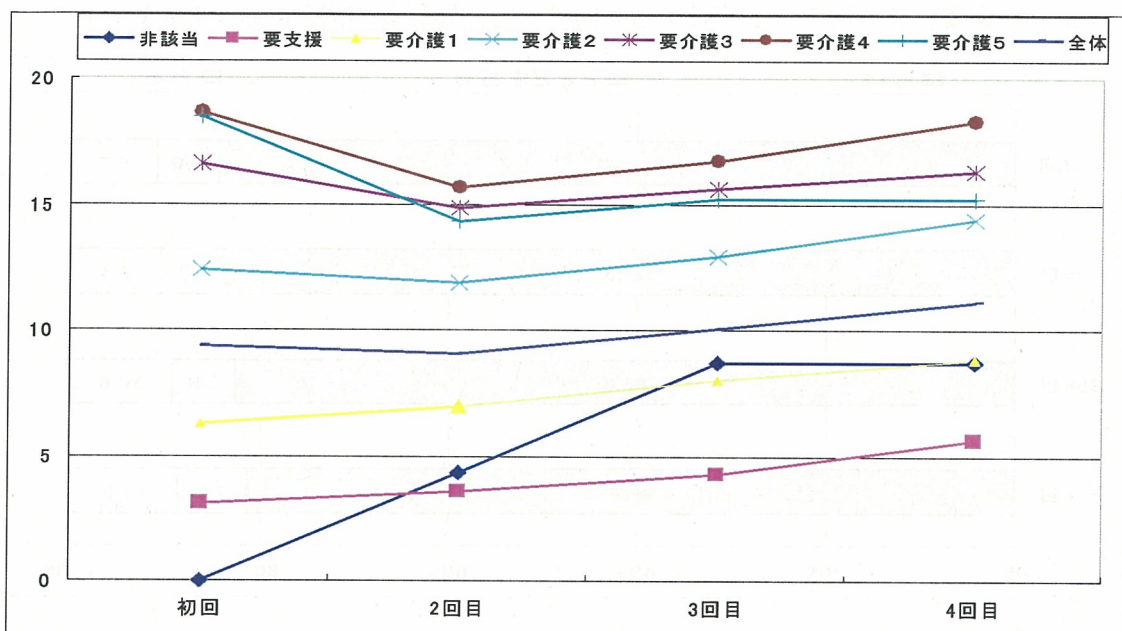


図 119 要介護度別大声を出す「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

表 113 要介護度別大声を出す「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	3.1	6.3	12.4	16.6	18.7	18.5	9.4
2回目	4.3	3.5	7.0	11.8	14.9	15.7	14.3	9.1
3回目	8.7	4.3	8.0	12.9	15.6	16.7	15.2	10.0
4回目	8.7	5.6	8.8	14.4	16.3	18.3	15.2	11.1

(50) 助言や介護に抵抗することが (介護に抵抗)

全体としての助言や介護に抵抗するという問題行動については、初回は「ない」が 13,639 名 (84.4%)、「ときどきある」が 1,064 名 (6.6%)、「ある」が 1,453 名 (9.0%) であった。2 回目は、「ない」が 13,551 名 (83.9%)、「ときどきある」が 1,090 名 (6.7%)、「ある」が 1,515 名 (9.4%) であった。3 回目は、「ない」が 13,350 名 (82.6%)、「ときどきある」が 1,097 名 (6.8%)、「ある」が 1,709 名 (10.6%) であった。4 回目は、「ない」が 13,154 名 (81.4%)、「ときどきある」が 1,169 名 (7.2%)、「ある」が 1,833 名 (11.3%) であった。

これらの結果から、大声をだす問題行動は、初回は 15.6%、2 回目 16.1%、3 回目 17.4%、4 回目 18.6%と認定回数が増加するにしたがって、漸次、増加していた。

要介護別には、非該当から要介護 1 までは、認定回数が増えるにしたがって、介護に抵抗する割合は増加していた。要介護 2 から 5 においては、初回から 2 回目に減少していた。また、要介護 2 から 4 までは、2 回目から 3 回目に増加し、3 回目から 4 回目も増加して

いたが、一方で、要介護5は2回目から3回目にも問題行動の割合は減少していた。

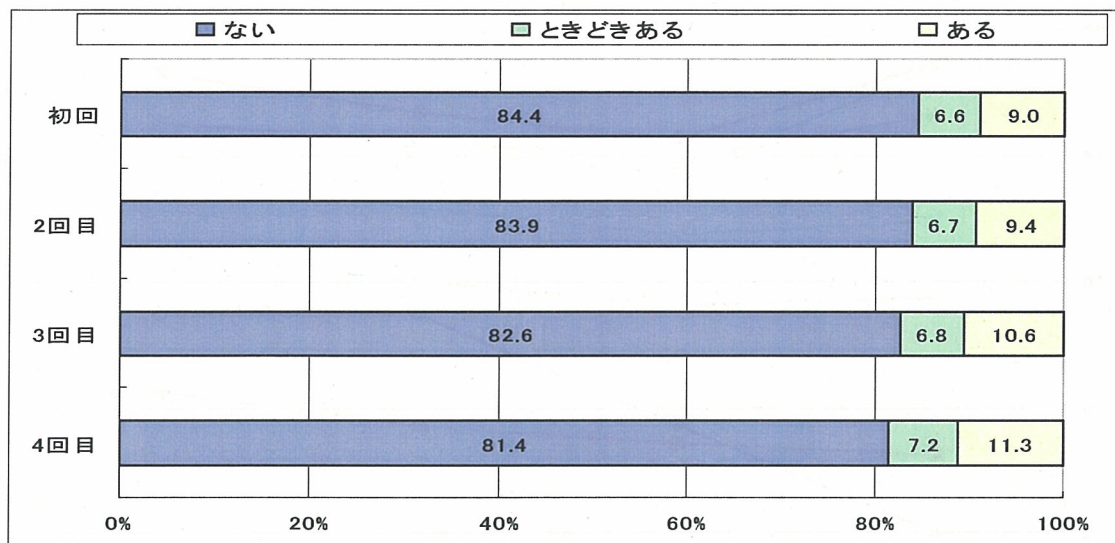


図 120 介護に抵抗 (N=16,156)

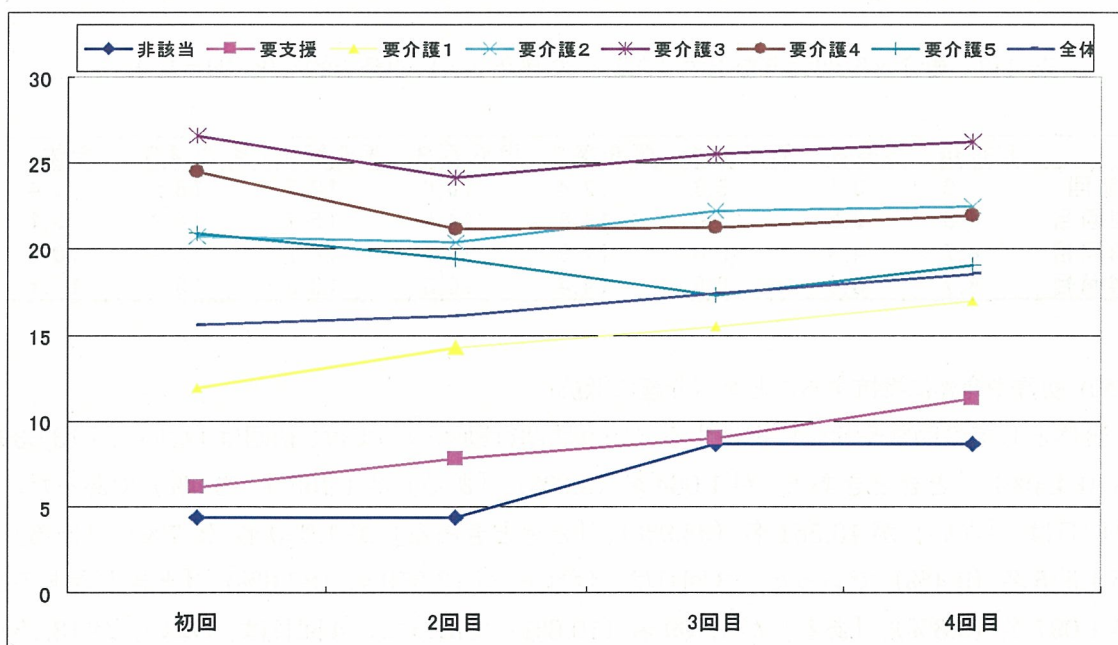


図 121 要介護度別介護に抵抗「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

表 114 要介護度別介護に抵抗「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	4.3	6.1	11.9	20.8	26.6	24.5	20.9	15.6
2回目	4.3	7.8	14.2	20.4	24.1	21.1	19.4	16.1
3回目	8.7	9.0	15.5	22.2	25.5	21.2	17.3	17.4
4回目	8.7	11.3	16.9	22.5	26.2	22.0	19.1	18.6

(51) 目的もなく動き回ることが（常時の徘徊）

全体として、目的もなく動き回るという問題行動は、初回は「ない」が14,650名(90.7%)、「ときどきある」が466名(2.9%)、「ある」が1,040名(6.4%)であった。2回目は、「ない」が14,659名(90.7%)、「ときどきある」が447名(2.8%)、「ある」が1,050名(6.5%)であった。3回目は、「ない」が14,610名(90.4%)、「ときどきある」が413名(2.6%)、「ある」が1,133名(7.0%)であった。4回目は、「ない」が14,539名(90.0%)、「ときどきある」が429名(2.7%)、「ある」が1,188名(7.4%)であった。

このように、常時徘徊がある割合は、初回と2回目は9.3%と同様であり、3回目は9.6%とわずかに増加し、4回目10.0%と増加していた。

要介護度別には、常時徘徊は要介護3で最もよく発生していた。非該当から要介護1までは、認定回数が増えるにしたがって、常時徘徊の割合も増加していた。逆に要介護3と要介護4は、認定回数が増えるにしたがって、常時徘徊の割合は減少していた。要介護2は、初回から2回目には、常時徘徊の割合は減少するが、2回目から4回目には、漸次、増加していた。また、要介護5では、初回から3回目までは減少するが、4回目で増加していた。

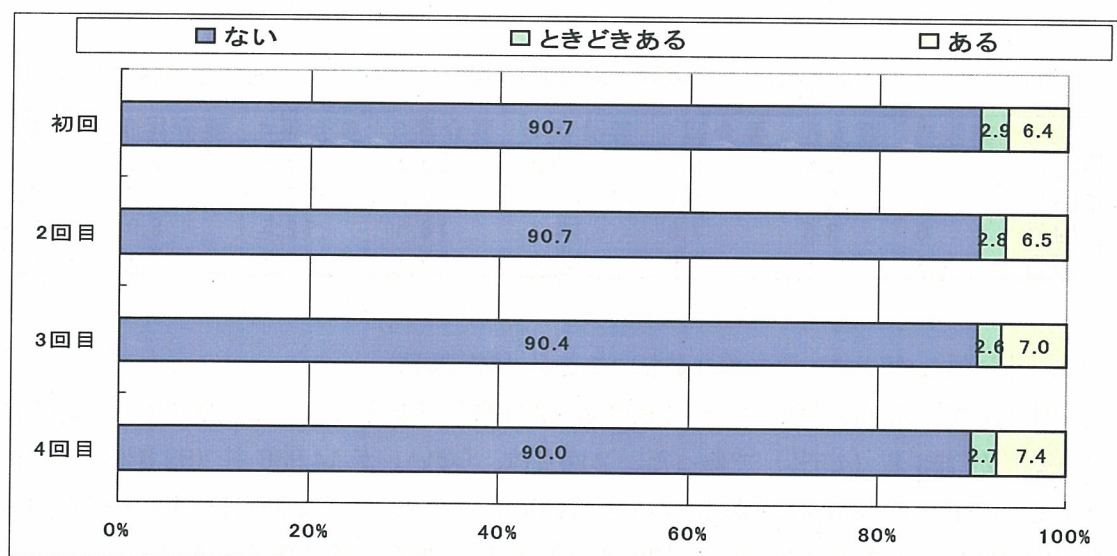


図 122 常時の徘徊 (N=16,156)

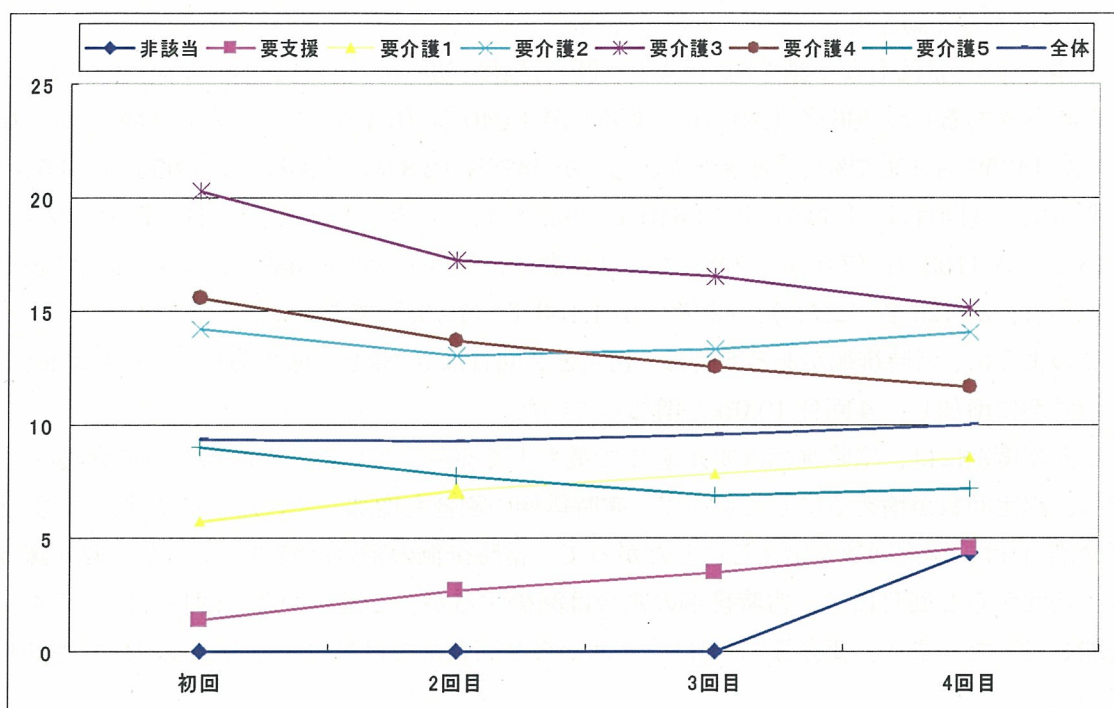


図 123 要介護度別常時の徘徊「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

表 115 要介護度別常時の徘徊「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	1.4	5.7	14.2	20.3	15.6	9.0	9.3
2回目	0	2.7	7.1	13.1	17.3	13.7	7.8	9.3
3回目	0	3.5	7.8	13.3	16.5	12.5	6.9	9.6
4回目	4.3	4.6	8.6	14.1	15.1	11.7	7.2	10.0

(52) 「家に帰る」と言い落ち着きがないことが (帰宅願望)

全体として、初回は「ない」が 14,953 名 (92.6%)、「ときどきある」が 468 名 (2.9%)、「ある」が 753 名 (4.5%) であった。2 回目は、「ない」が 14,986 名 (92.8%)、「ときどきある」が 489 名 (3.0%)、「ある」が 681 名 (4.2%) であった。3 回目は、「ない」が 14,823 名 (91.7%)、「ときどきある」が 502 名 (3.1%)、「ある」が 831 名 (5.1%) であった。4 回目は、「ない」が 14,764 名 (91.4%)、「ときどきある」が 493 名 (3.1%)、「ある」が 899 名 (5.6%) であった。

このような帰宅願望によって起こる、行動の異常という問題行動がある割合は、初回が 7.4% から、2 回目 7.2% へと減少するが、3 回目 8.3%、4 回目 8.6% へと増加していた。

要介護度別には、非該当ではこのような問題行動は起こっていなかった。要介護 3 と 4 で最もよく起きている問題行動であった。要支援から要介護 2 までは、認定回数が増えるにしたがって、この問題行動がある割合は増えていた。逆に要介護 4 と 5 では、認定回数が増えるにしたがって、この問題行動の割合は減少していた。要介護 3 は、初回から 3

回目までは、漸次、減少していたが4回目で増加していた。

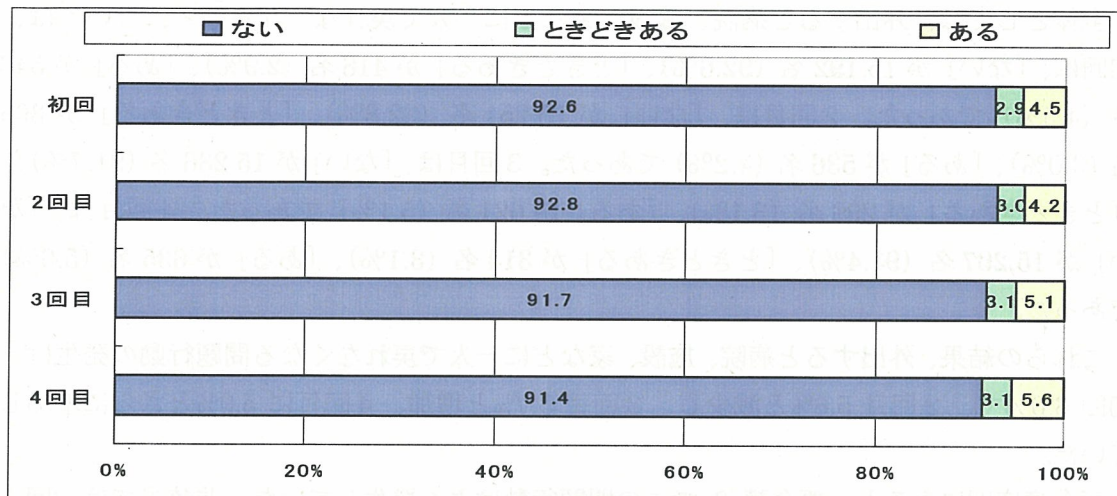


図 124 帰宅願望による落ち着きなし (N=16,156)

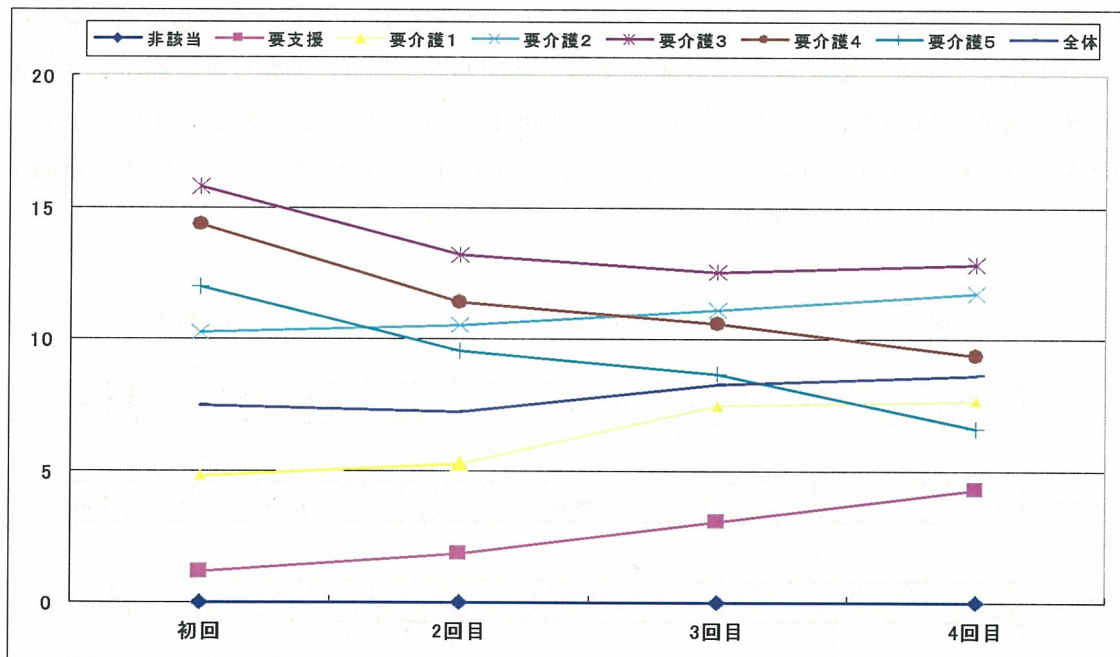


図 125 要介護度別 帰宅願望による落ち着き「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

表 116 要介護度別帰宅願望による落ち着き「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	1.2	4.8	10.2	15.8	14.3	11.9	7.4
2回目	0	1.8	5.3	10.5	13.2	11.4	9.6	7.2
3回目	0	3.1	7.5	11.1	12.5	10.6	8.7	8.3
4回目	0	4.3	7.6	11.7	12.8	9.3	6.6	8.6